

大瀬古遺跡発掘調査報告

— 三重県松阪市小阿坂町 —

2014（平成26）年10月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

- 1 本書は三重県松阪市小阿坂町に所在する大瀬古遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の調査は、平成23年度特定農業用管水路等特別事業一志南部1期地区に伴い、三重県教育委員会が三重県農林水産部（旧農水商工部）から依頼を受けて実施した。なお、現地調査については、松阪農林事務所（旧松阪農林商工環境事務所）からの労務提供による。
- 3 発掘調査の経費は、その一部を国庫補助金を得て三重県教育委員会が負担し、他は三重県農水商工部から経費の執行委任を受けた。
- 4 平成23年度調査の体制等は次のとおりである。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

　　調査研究1課（旧I課） 主査 谷口文隆

　　技師 高松雅文

調査期間 平成24年1月10日～平成24年1月13日

調査面積 108m²

- 5 調査にあたっては、地元の方々をはじめ、三重県農水商工部、松阪農林商工環境事務所、松阪市教育委員会、株式会社北村組の協力を得た。

- 6 当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査研究1課が行い、本書の執筆・編集は谷口文隆が行った。

- 7 当地は平面座標系第VI系に属しており、本書での方位は座標北を使用している。

なお、座標値は世界測地系2000に基づいて表示している。

- 8 遺跡地形図及び調査区位置図は、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得て、同組合所管の「2006三重県共有デジタル地図(数値地形図2500(道路縁1000))」を使用し、調整したものである。(承認番号：三総合地第93号)

- 9 当発掘調査の記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化センターで保管している。

- 10 土層及び遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行の『新版標準土色帖(21版)』による。

- 11 本書では、以下のように遺構の略記号表記をしている。

S D : 溝

目 次

I 前 言	1
1 調査に至る経過	
2 文化財保護法等に関する諸手続	
3 調査経過	
II 位置と環境	2
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
III 遺 構	5
IV 遺 物	7
V 結 語	8

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 遺跡地形図	4
第3図 調査区位置図	4
第4図 調査区平面図	5
第5図 調査区土層断面図	6
第6図 出土遺物実測図	7

表 目 次

第1表 出土遺物観察表	7
-------------------	---

写 真 目 次

大瀬古遺跡周辺地形	9
調査区全景	10
工事終了後風景	12
出土遺物	12

I 前 言

1 調査に至る経過

2009年度から特定農業用管水路等特別対策事業一志南部1期地区が実施されている。特定農業用管水路等特別対策事業とは、施設の老朽化に伴う、石綿を含有する製品の破損等により、将来的に農業者等の健康を害するおそれがある懸念されることから必要な対策を講ずることにより、石綿に起因する影響を未然に防止し、農業経営の安定及び農業の維持に貢献することを目的とした事業である。これに伴い石綿等が使用されている農業用管水路の撤去及び新農業用管水路の埋設が当地域においても実施されている。

三重県埋蔵文化財センターでは、当該事業地内には周知の遺跡である大瀬古遺跡が存在することから、その取扱いについて県農林水産部（旧農水商工部）と協議を実施した。協議の結果、事業地内360m²を対象に範囲確認調査を実施することになった。平成23年11月7日に範囲確認調査を実施し、調査坑の一部から土坑及びピットが検出された。この結果を踏まえ、三重県埋蔵文化財センターと松阪農林事務所（旧松阪農林商工環境事務所）で協議を実施した。その結果、108m²の範囲を工事に合わせて発掘調査を実施し、記録保存することとなった。

2 文化財保護法に関する諸手続

文化財保護法（昭和25年法律第214号）および三重県文化財保護条例（昭和32年条例第72号）にかかる諸手続は以下のとおりである。

○ 三重県埋蔵文化財保護条例第48条第1項

・平成23年10月31日付 松農環第4316号

三重県知事から三重県教育委員会教育長あて

「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」（大瀬古遺跡）

○ 三重県埋蔵文化財保護条例第48条第2項

・平成23年11月4日付 教委第12-4091号

三重県教育委員会教育長から三重県知事あて

「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」（大瀬古遺跡）

○ 文化財保護法第100条第2項

・平成24年1月23日付 教理第12号-4420号

三重県教育委員会教育長から松阪警察署署長あて

「埋蔵文化財の発見について（通知）」

3 調査の経過

調査対象地が道路であり、調査区北端には道路に沿って個人宅がある。そのため調査は、重機本体が個人宅の入り口をふさぐことのないよう、調査区を北側から南側に向かって実施した。1月10日に重機掘削による表土除去を行い、1月11日に人力による包含層及び遺構掘削を行った。1月12日に全景写真撮影及び実測を行い、1月13日に実測を継続して行った。同日には調査を終了し、松阪農林商工環境事務所に現地を引き渡した。

4 調査の方法

今回の発掘調査は、農業用管水路の埋設箇所のみの範囲であり、延長40m、幅約2mと南北に細長い狭小な調査区である。そのため、調査区内の任意の2点を結ぶ線を基準線とし、それにしたがって4m×4mの方眼（グリッド）を設定し、調査の基本単位とした。なお、設定軸と国土座標は無関係である。

図面については、全体の遺構平面図及び土層断面図を1/20で作成した。

写真撮影は、調査区全景については6×7判（ブローニー）で撮影し、補助として35mmカメラを併用した。フィルムはそれぞれモノクロネガフィルム及びカラーリバーサルフィルムを使用している。遺物については、報告書掲載資料より任意に選択し、6×9判（ブローニー）で撮影した。フィルムはモノクロネガフィルムを使用している。

なお、現地作業については、松阪農林商工環境事務所からの労務提供により実施した。

II 位置と環境

1 地理的環境

三重県のほぼ中央に位置し、東は平野で西は山地である松阪市において、大瀬古遺跡(1)は伊勢寺扇状地に立地する。伊勢寺扇状地は觀音岳、堀坂山周辺の山地が洪積世の大洪水によって浸食、運搬され谷の出口に大がかりに堆積した扇状地である。觀音岳の西側は急斜面であるが、東側は緩斜面である。この緩斜面が扇形にひろがり、大阿坂から伊勢寺に及び、扇状地の形成時に三渡川、岩内川、堀坂川、坂内川が形成されたと考えられている。また扇状地であるため、西方の山地に降った雨は東に流れ、扇頂部で地下に潜り伏流水となる。そのため、扇頂部、扇央部では谷川の水を堰き止めた溜池が、扇端部では伏流水の湧水を利用した溜池が多数存在する。現在もこの豊かな水が扇状地一帯の水田を潤している。^①

2 歴史的環境

縄文時代 新田遺跡(2)では後期を中心として、早期から晩期に至る縄文土器が出土している。藪ノ下遺跡(3)では中津式など中期から後期を中心に、伊勢寺遺跡からは後期初頭から前半の土器が出土している。また西藏寺廃寺(4)から出土している土器片も後期と考えられており、後期にはこの一帯に広く活動していたことが考えられる。

弥生時代 中ノ庄遺跡(5)から遠賀川式土器が出土するとともに集落跡が確認されており、中期前半頃までの拠点的集落と考えられている。宮ノ腰遺跡(6)からは前期の壺と甕が出土している。堀坂川沿いでは、田高田遺跡(7)から中期特有の器形と施文を持つ土器片が多数出土し、城垣内遺跡(8)、蛸遺跡(9)からも中期の土器片が出土している。下林遺跡(10)、わこ畑遺跡(11)、阿形遺跡(12)からは後期の土器が出土している。また田村西瀬古遺跡(13)では後期と考えられる方形周溝墓が検出され、上野墳墓群(14)には前方後円形墳丘墓が確認されている。後期後葉では、上ノ庄北出遺跡(15)から受口状口縁甕が出土している。^⑪

古墳時代 当遺跡の北方約2.5kmの丘陵に前期の前

方後方墳である向山古墳(16)がある。向山古墳は、中村川下流域の旧一志郡域を中心とした地域的集団の首長墓と推測されている。^⑮ また坂内川水系流域では二重口縁壺が出土している深長古墳(17)があり、八重田古墳群(18)においては、4世紀後半の1号墳から二神二獸鏡や玉、鉄劍が出土し、首長層と推定されている。^⑯ このように前期には北に向山古墳、南に八重田1号墳をそれぞれ中心としたグループができていたものと想定されている。中期では、中南勢地域において最大の規模であり、船形埴輪が出土した宝塚1号墳(19)があり、首長墓と推定されている。^⑰ 後期になると、瑞巖寺古墳群(20)、上文殊古墳群(21)、下文殊古墳群(22)、平林古墳群(23)など、横穴式石室を主体とし、丘陵地の狭い面に小規模墳が集中して造られるという群集墳が、岩内川周辺より以南に多くなる。^⑱ 集落跡としては堂ノ後遺跡(24)、杉垣内遺跡(25)から竪穴住居が検出されている。^⑲

奈良・平安時代 伊勢寺廃寺(26)と丹生寺廃寺(27)、ヒタキ廃寺(28)の創建時期が白鳳期に比定されている。^⑳ 伊勢寺廃寺では、東西150m、南北180mの方形の地割が残されており、中軸線が真北をさしている。また、ヒタキ廃寺、打田遺跡(29)周辺でも、条里地割以前の真北方向の地割が残っている。^㉑ 伊勢寺廃寺を中心に榎長遺跡(30)から曲遺跡(31)まで扇状地に広く遺跡が分布しており、榎長遺跡では奈良～平安初頭の竪穴住居と掘立柱建物、前沖遺跡(32)では奈良後期の竪穴住居、掘立柱建物が検出されている。曲遺跡では奈良時代後半～平安時代の掘立柱建物が数多く検出されており、また多量に出土した灰釉陶器や緑釉陶器から、在地領主層的な存在も考えられている。^㉒ また、ヒタキ廃寺では多数の瓦が出土しており、打田遺跡では、官衙的配置の掘立柱建物が検出されている。^㉓ 当地においては、式内社の阿射加神社(33)が大阿坂と小阿坂の両方に所在している。

古代から中世 曽祢莊、須可莊、阿射賀御厨など、当地には莊園が広がるようになる。宮ノ腰遺跡からは鎌倉時代の掘立柱建物、井戸、集落域を区画すると考えられる溝が見つかっており、墨書き茶碗や花

押も出土していることから、曾祢莊の荘官クラスの屋敷地と見られる。そして、南北朝時代以降、この地域は伊勢国司北畠氏の支配を受けることとなる。別名「白米城」とも呼ばれる阿坂城(34)をはじめ、伊勢寺城(35)、枳城(36)、高城城(37)など多くの山城が舟形山から派生する尾根上や堀坂山系に築かれることとなる。

その後、織田氏、蒲生氏、服部氏、古田氏の支配・統治を経て元和5年(1619)に紀州藩領となり明治に至ることとなる。

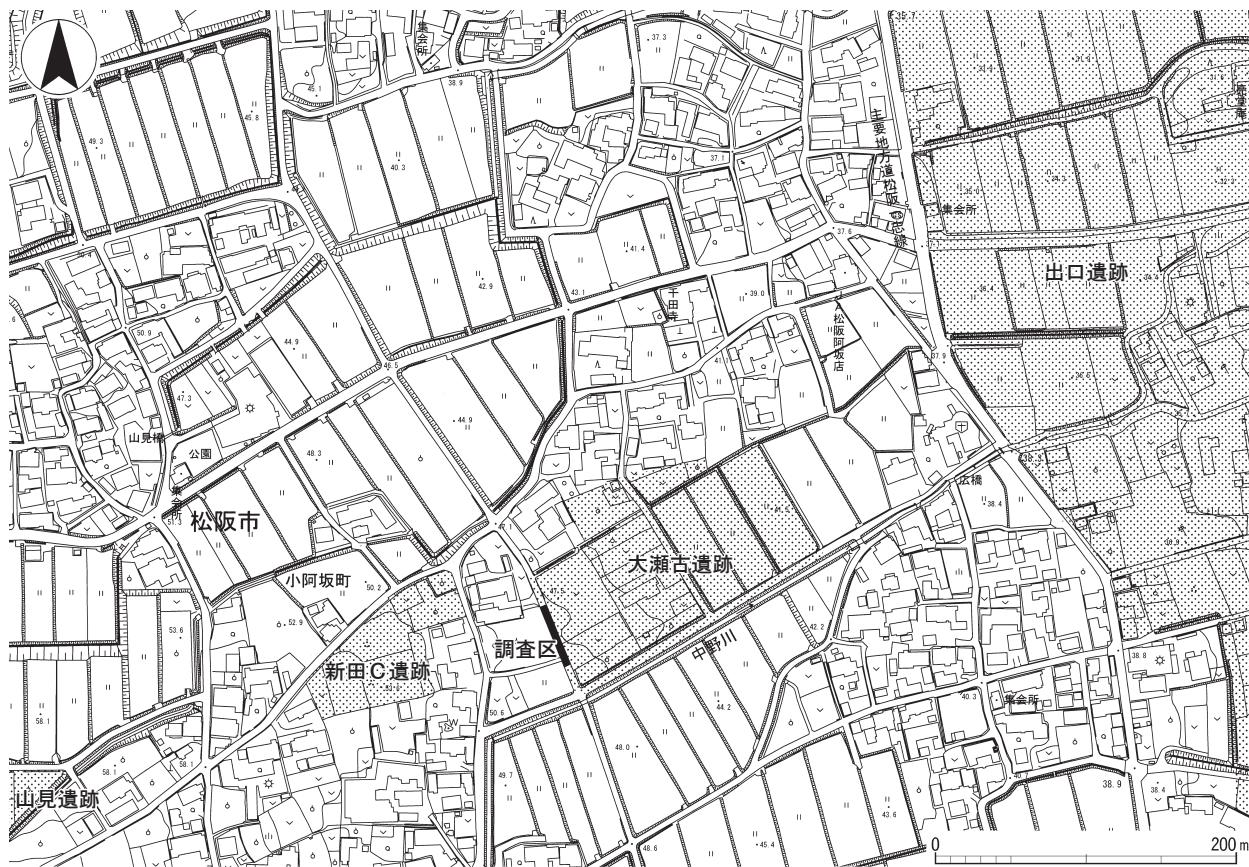
[註]

- ① 松阪市教育委員会『松阪市史第一巻史料編自然』(1978年)
- ② 三重県教育委員会『近畿自動車道(久居~勢和間)埋蔵文化財発掘調査報告第2分冊』(1990年)
- ③ 三重県教育委員会『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告第2分冊』(1989年)

- ④ 三重県埋蔵文化財センター『西藏寺廃寺発掘調査報告』(2011年)
- ⑤ 三重県教育委員会『中ノ庄遺跡発掘調査報告』(1972年)
- ⑥ 三雲町史編集委員会『三雲町史 第一巻 通史編』(2003年)
- ⑦ 三重県埋蔵文化財センター『宮ノ腰遺跡発掘調査報告』(1997年)
- ⑧ 松阪市教育委員会『松阪市史第二巻史料編考古』(1978年)
- ⑨ 三重県埋蔵文化財センター『田村西瀬古遺跡発掘調査報告』(1999年)
- ⑩ 松阪市『嬉野史考古編』(2006年)
- ⑪ 三重県埋蔵文化財センター『上ノ庄北出遺跡発掘調査報告』(1998年)
- ⑫ 三重県教育委員会『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告I』(1989年)
- ⑬ 松阪市教育委員会『八重田古墳群発掘調査報告』(1981年)
- ⑭ 松阪教育委員会『宝塚古墳発掘調査報告』(2005年)
- ⑮ 三重県埋蔵文化財センター『伊勢寺・下川遺跡ほか』(1990年)
- ⑯ 三重県埋蔵文化財センター『ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか』(1992年)
- ⑰ 三重県教育委員会『前沖遺跡発掘調査報告』(1986年)
- ⑱ 三重県教育委員会『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』(1985年)
- ⑲ 濑野清一郎編『日本莊園史大辞典』吉川弘文館(2003年)
- ⑳ 三重県埋蔵文化財センター『宮ノ腰遺跡発掘調査報告II』(1999年)



第1図 遺跡位置図 (1:50,000) [国土地理院「大仰」「松阪港」「大河内」「松阪」1:25,000より作成]

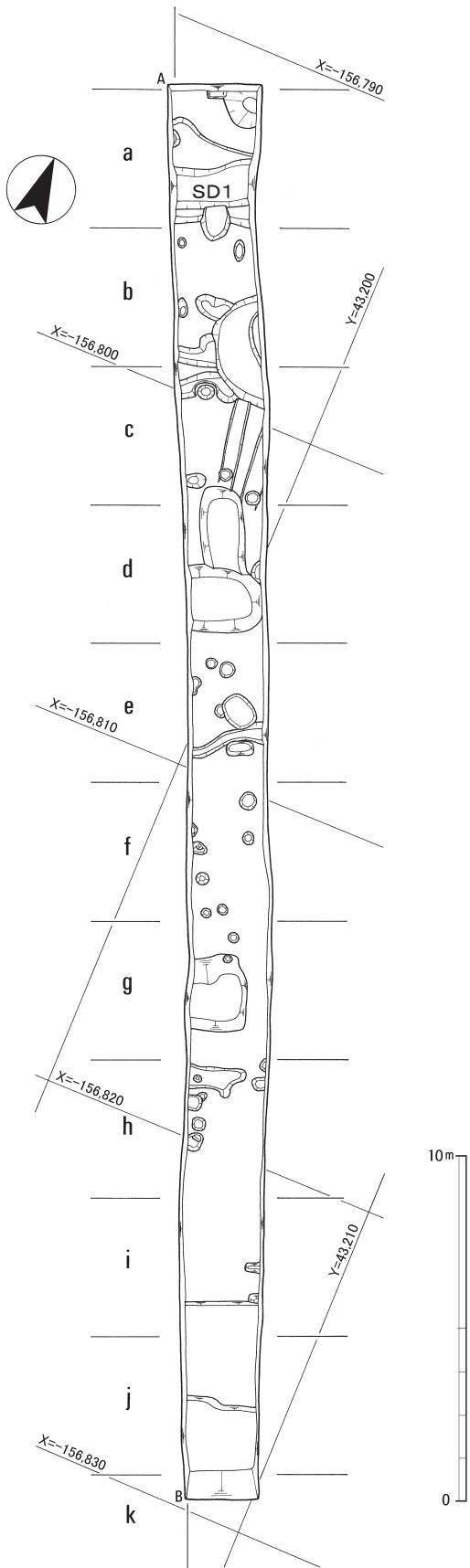


第2図 遺跡地形図 (1:5,000)



■は確認調査坑
第3図 調査区位置図 (1:2,000)

III 層位と遺構



第4図 遺構平面図 (1:200)

1 基本層位

調査区は伊勢寺扇状地上に位置する。標高は約48mである。土層断面図は、西壁を図示した。

発掘の対象となる部分については現在道路となっている。そのため、上からアスファルトとそれに伴う碎石、整地土（第3・4・5層）及び第6層までが盛土である。整地土の下には、包含層があり、道路からおよそ80cmの深さで、調査区の基本となる地山である。地山については黄褐色系の色調を呈し、扇状地に立地していることに関連しているためか、砂粒のやや粗い特徴を示している。また調査区南端部では、還元色の色調を呈する砂粒の細かい地山が検出されている。これは黄褐色系の地山より低い位置で確認され、切り合いは確認できないものの、黄褐色系の地山より下層になると考えられる。包含層については、調査区ほぼ全面に層をなしているものの、場所によって色調の変化を見せ、またその下層から遺物・遺構が出土していることから、中世以降に流入し、堆積したものであろうと考えられる。

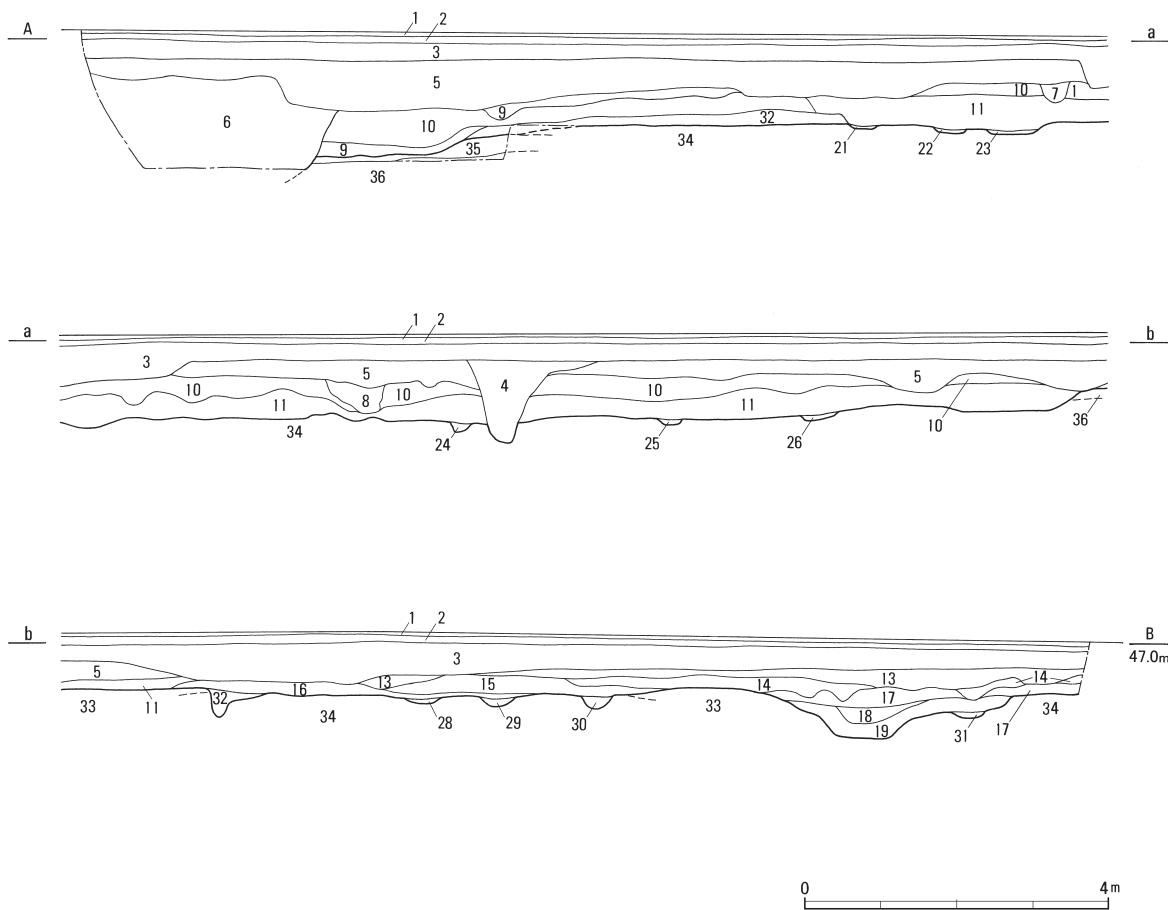
現代の搅乱がある部分（d 1・g 1 グリッド）は、ほぼ調査区幅と重なるため、土層断面図には表れないものの、調査区中央からは現代の重機の跡が見られるなど、部分的に検出面が削平されていることも考えられる。

2 遺構

調査の結果、溝1条と土坑、小穴が数基検出された。溝以外は遺物を伴っていないことと、狭小な調査区であるため、遺構の全体を把握するのは難しい。小穴についても、配列が定まっておらず、柱跡などのかどうかは確認できない。また、包含層からは須恵器の杯、硯、古代の土師器甕が出土しており、表土からも須恵器の甕が、小片であるが出土している。

SD 1 調査区北部のa 1 グリッドで検出した、幅約3mの溝である。埋土は、下層として厚さ約20cmの黒褐色土があり、その上に、幅約1m、厚さ約20cmの黒シルトが見られる。この黒シルト層から須恵器が1点であるが出土し、さらにこの溝を覆うよう

に黒ボクに近い土質を見せる黒褐の層がある。またこの溝は東西の向きになっていることから、古代より以前に、西の扇頂部から東の平野部に向かって流れていたもので、古代には溝の幅や深度が縮小し、中世には埋没したものと考えられる。



調査区西壁

- 1 アスファルト
- 2 5BG7／1明青灰 砂（碎石）
- 3 2.5Y4／2暗灰黄 細粒砂（整地土）
- 4 2.5Y4／1黄灰 細粒砂 しまりなし 粘質なし 針金・ビニール含む（現代搅乱）
- 5 10YR3／1黒褐 細粒砂（一部極細粒砂） しまりあり 粘質ややあり
- 6 10YR3／2黒褐 細粒砂（一部極細粒砂） しまりなし 粘質ややあり
大量の桟瓦・ビニール含む（現代搅乱）
- 7 10YR3／1黒褐 細粒砂 しまりなし 粘質ややあり
- 8 10YR2／3黒褐 極細粒砂 しまりややあり 粘質ややあり（風倒木）
- 9 10YR4／3にぶい黄褐 極細粒砂 しまりあり 粘質ややあり
- 10 7.5YR3／3暗褐 極細粒砂 しまりあり 粘質あまりなし
- 11 7.5YR2／1黒 シルト・極細粒砂（一部中粒砂） 長径5cm以下の砾を5%含む しまりややあり 粘質あり
- 12 10YR2／2黒褐 極細粒砂～細粒砂 しまりあまりなし 粘質あり
(北半は7.5YR4／6の砂 細粒砂 しまりなし
粘質なし長径5cm以下の砾を5%含む 色調・粒度の度合いが強くなる)
- 13 5BG2／1青黒 極細粒砂 しまりあり 粘質なし（整地土）
- 14 10YR3／2黒褐 極細粒砂 しまりあり 粘質ややあり（旧耕作土）
- 15 10YR3／1黒褐 極細粒砂 しまりあり 粘質あり
- 16 7.5YR2／1黒 極細粒砂（一部細粒砂） しまりあり 粘質ややあり
- 17 10YR2／2黒褐 極細粒砂 しまりあり 粘質あり
- 18 10YR2／1黒 シルト しまりややあり 粘質あり (SD1埋土)
- 19 10YR2／3黒褐 極細粒砂 しまりややあり 粘質あり (SD1埋土下層)
- 20 2.5Y3／2黒褐 細粒砂（一部中粒砂） しまりなし 粘質なし
- 21 2.5Y2／1黒 細粒砂（一部中粒砂） しまりややあり 粘質なし
- 22 10YR2／2黒褐 細粒砂 しまりなし 粘質なし
- 23 10YR3／3暗褐 細粒砂 しまりなし 粘質なし
- 24 2.5Y3／1黒褐 極細粒砂（一部細粒砂） しまりややあり 粘質ややあり
- 25 7.5YR3／1黒褐 細粒砂 しまりなし 粘質なし
- 26 5Y2／1黒 極細粒砂 しまりなし 粘質なし
- 27 7.5YR2／2黒褐 細粒砂（一部中粒砂） しまりあり 粘質なし
- 28 10YR3／4暗褐 細粒砂 しまりややあり 粘質なし
- 29 10YR3／3暗褐 極細粒砂 しまりややあり 粘質なし
- 30 2.5Y3／1黒褐 細粒砂 しまりややあり 粘質なし
- 31 7.5YR2／1黒 極細粒砂（一部細粒砂） しまりなし 粘質なし
- 32 7.5YR2／2黒褐 極細粒砂（一部シルト） しまりややあり 粘質ややあり
- 33 10YR4／6褐 中粒砂 しまりなし 粘質なし（砂洲状の地山）
- 34 10YR4／3にぶい黄褐 細粒砂（一部中粒砂） しまりあり 粘質なし
(地山)
- 35 2.5Y3／1黒褐 極細粒砂～細粒砂 しまりややあり 粘質あり
還元色の色調を帯びる（地山）
- 36 2.5Y4／1黄灰 極細粒砂～細粒砂 しまりややあり 粘質なし
還元色の色調を帯びる（地山）

第5図 土層断面図 (1:100)

IV 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、多くが奈良・平安時代のものと考えられ、またそのほとんどが遺構に伴わないものである。しかし若干であるものの、表土採集により中世陶器も採集されている。

1は土師器甕の口縁部片で、小片のため全体の形態は明確でないが、口縁部の形態は上方につまみ上げられている。2は須恵器の杯身で、復元口径は17.0cm、器高は6.0cmである。底部からの側面の立ち上がりは屈曲しており、底部と体部の境界は明瞭で、口縁部はやや外反している。高台はやや薄手で外側にのびている。全体はロクロナデによって調整され、底部内面には直線ナデ痕が観察でき、底部外面には回転を利用したヘラケズリが施されている。奈良国立文化財研究所の編年による平城宮Ⅲ～Vにあたると考えられ、年代としては8世紀中葉以降であると思われる。3は須恵器杯身で、復元高台径は13.0cmである。全体はロクロナデによって調整されており、底部の外面にはロクロケズリ、内面にはロ

クロナデが施されている。4も須恵器月見で、全体はロクロナデによって調整されている。胎土は1mm以下の砂粒が若干含まれており、2や3に比べてやや粗い。杯の底部から体部への立ち上がりが明瞭に分かれているが、全体の把握は難しく古代と見られるものの、詳しい時期決定には至らない。

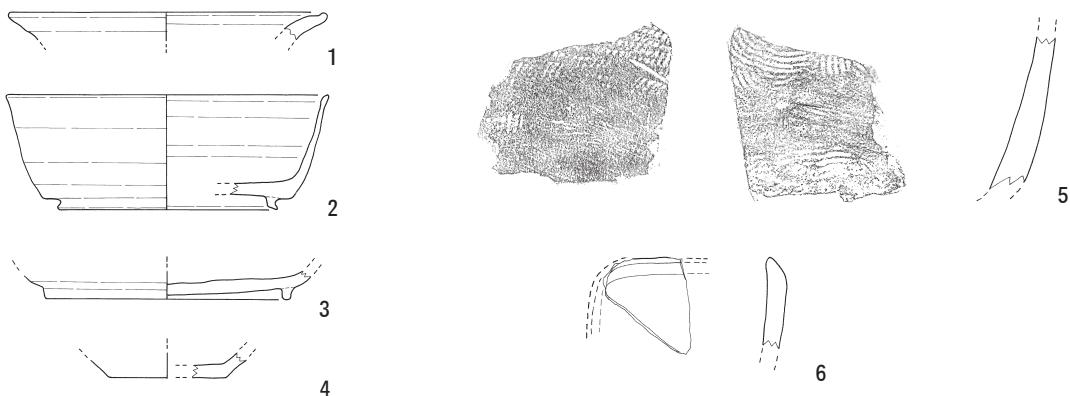
5は須恵器の甕である。体部外面にタタキ痕が、内面には同心円の当て具痕が見られ、古代と見られるが、詳しい時期決定は控えておく。

6は須恵器の風字硯で、口縁部が直線的な部分とほぼ直角に屈曲していく部分が見られる。口縁の先端部のみ自然釉がかかり、硯面には使用痕が見られる。斎宮跡出土陶硯編年を参考にすると、平安時代前期と考えられる。

【註】

① 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査情報VII』(1976年)

② 角正芳浩「斎宮の硯」『斎宮歴史博物館研究紀要8』斎宮歴史博物館 (1999年)



第6図 出土遺物実測図（1:4）

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種 器形	法量(cm)			調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
					口径	器高	その他					
1	1-4	c-1 包含層	—	土師器 甕	16.8	—	—	ナデ	淡橙 (5YR8/3)	1mm以下の砂粒 若干含	口縁部小片	
2	1-1	c-1 包含層	—	須恵器 杯身	17.0	6.0	高台径 11.3	外面ロクロナデ、ヘラケズリ 内面ロクロナデ、底部直線ナデ	黄灰 (2.5Y6/1)	密	1/12残	
3	1-2	a-1	SD 1	須恵器 杯身	—	—	高台径 13.0	外面ロクロナデ、ヘラケズリ 内面ロクロナデ、底部直線ナデ	褐灰 (10YR6/1)	密	底部1/12残	
4	1-3	c-1 包含層	—	須恵器 杯身	—	—	底部径 6.0	外面ロクロナデ、ヘラケズリ 内面ロクロナデ	灰黄褐 (10YR6/2)	1mm以下の砂粒 若干含	底部1/12残	
5	1-5	表土	—	須恵器 甕	—	—	—	外面タタキ (格子目風) 内面当て具痕 (同心円文)	灰黄 (2.5Y6/2)	密	体部片	
6	2-1	a-1 包含層	—	須恵器 硯	—	—	—	ナデ	灰黄 (2.5Y7/2)	密	1/12残	口縁端部に釉がかかる。使用痕有り。

第1表 出土遺物観察表

V 結語

今回の調査では、溝1条のほか、遺物を伴わないが、土坑1基と小穴を数個確認した。溝のSD1は、東西方向にむいており、西方の山側より、東方の平野側に向かって流れていたと思われる。2層の埋土からなり、上層より須恵器が出土していることから、奈良時代以前から平安時代にかけてのものであると考えられる。ほかにも遺構に伴わないものの、須恵器が数点出土していることから、当地は奈良時代より生活が広がりはじめたとみることができる。

奈良・平安時代のこの地域において、著名な遺跡として伊勢寺廃寺がある。伊勢寺廃寺からは、祭事などの特殊な用途に用いられた可能性のある奈良三彩の三彩陶器が出土し、伊勢寺の造営主体者が中央政府と密接な関係を持っていたことが想定されている^①。また伊勢寺廃寺に隣接して当地域において最も規模の大きい伊勢寺遺跡がある。伊勢寺遺跡は深長集落から伊勢寺集落にかけて広がる扇状地に位置し、面積500,000m²にも及ぶ。そこから、伊勢寺が拡充・整備された奈良時代から平安時代初期にかけての時期とほぼ同時代の掘立柱建物、竪穴住居が見つかっている^②。伊勢寺廃寺から北に2km弱の位置で同じ扇状地内に所在する大瀬古遺跡においても、住居跡等は確認できなかったが、当遺跡から時代を同じくする土器が出土したことの意義は大きい。大瀬古遺跡もまた、この地域の大きな勢力下の範囲であったと

いうことが考えられるのである。

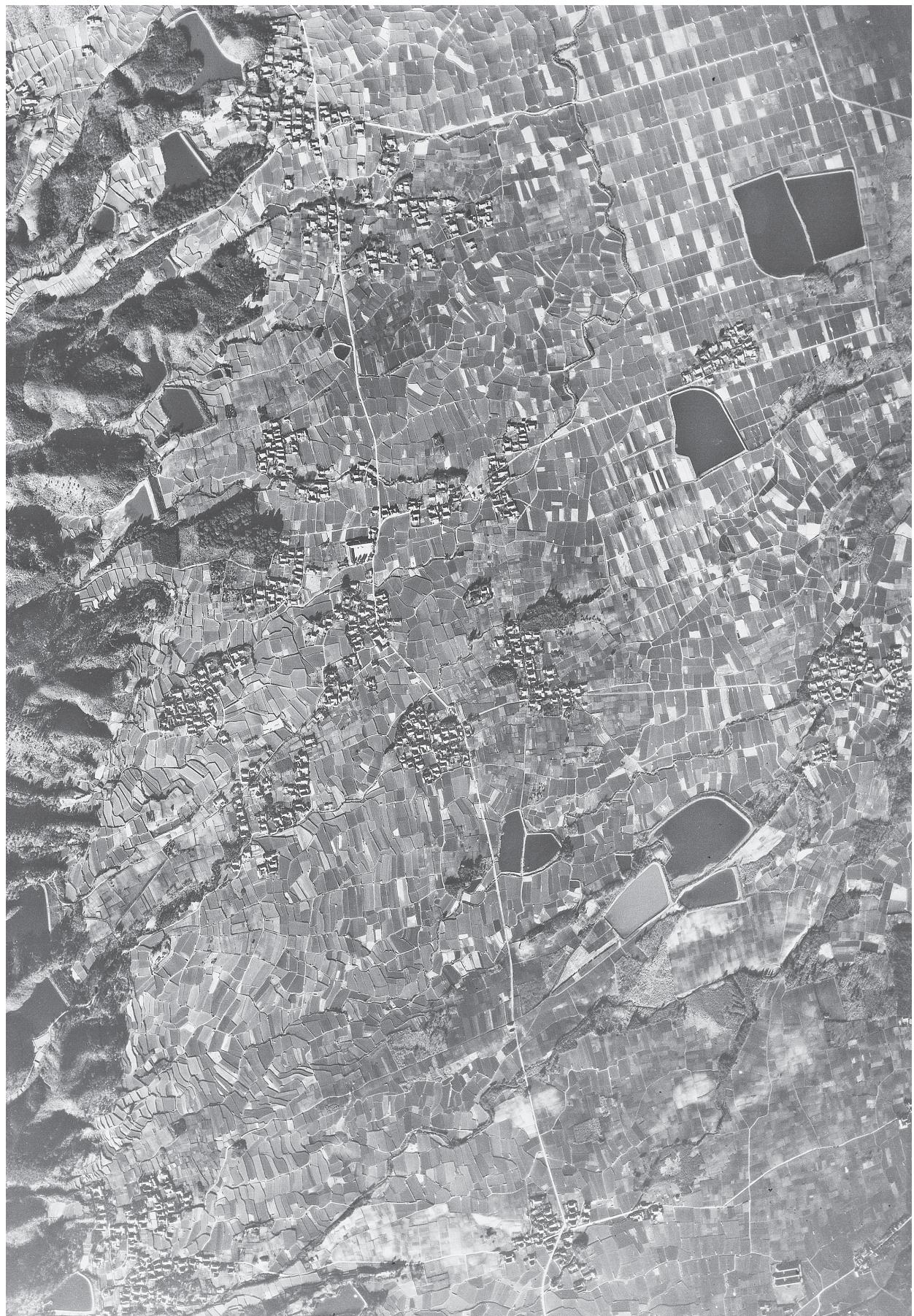
出土遺物の中に、1点であるが硯がある。硯は風字硯で、より実用的のものである。奈良時代、写経などとともに、筆墨は大きく発展し、役所においても物書きは日常の仕事であった^③。そのため杯や杯蓋が転用硯として用いられることもあることが分かれている。当地から硯が出土したということは、当地が役所的な集落、あるいは寺院に關係している場所であるか、あるいは権力者の居館等が近辺に存在したかという可能性も考えられる。伊勢寺廃寺、阿射加神社など大きな寺社が近くに所在したことからも、それらと何らかの関連があったということも考えられる。

また、当遺跡は西方の新田C遺跡と一連のものであると考えられている^④。いずれも外宮領阿射加御厨の領域内であると考えられるものの、中世の遺物はほとんど確認されていない。この時代、この地域では、荘園の形成が進められた時代である。御厨として11世紀に建立されたわけであるが、そのことでこの地の居住地に若干の変化があったのかもしれない。

【註】

- ① 三重県『三重県史 資料編考古2』(1998年)
- ② 三重県埋蔵文化財センター『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』(1990年)
- ③ 石井則孝『考古学ライブライアリーナー42 陶硯』(1985年)
- ④ 松阪市史編さん委員会『松阪市史第二巻資料編考古』(1978年)

写真図版 1



大瀬古遺跡周辺地形(南側上空から)[昭和22~23年頃米軍撮影]

写真図版2



調査区全景(北から)



調査区全景(北東から)

写真図版 3



調査区全景(南東から)



ピット群(北から)

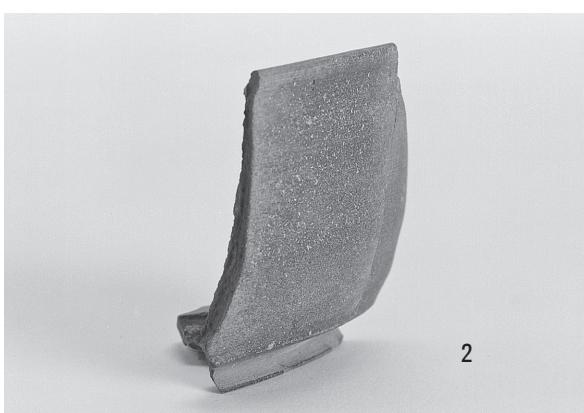
写真図版 4



工事終了後風景(北から)



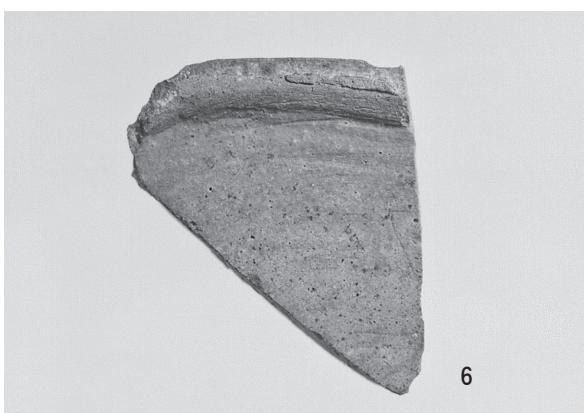
1



2



5



6

出土遺物

報 告 書 抄 錄

三重県埋蔵文化財調査報告 354
大瀬古遺跡発掘調査報告

2014（平成26）年10月

編集 三重県埋蔵文化財センター
発行 光出版印刷株式会社
印刷
